

植田家の人々と学芸

藪田 貫



はじめに

本日、一緒に講演します李熙連伊さんは、以前勤めていた大学の教え子です。それがこのように一緒のところでは話すというのは、教師としては冥利につけるようなところがあります。以前、しばらくの間、八尾の西山本に住んでおり、彼女の職場が近かったもんですから、私共の息子2人とよく歴史民俗資料館に遊びに行きました。彼らは熙連伊さんと、姓を呼ばないで名前ばかり呼んでいましたので、私も普段から熙連伊、熙連伊と、呼び捨てにさせていただいております。そういう間柄が持てるのは個人的には大変幸せなことだと思うんですが、彼女と二人並んで喋れるということで喜んでおります。

お手元に机がないのに、私の方はレジユメの数が多くて申し訳ない次第です。何枚か地図を含めて資料がありますので、適宜、見ていただいたら結構でございます。

さて、岸本課長からご紹介がありましたように、私もいくつかの市史の編纂委員を勤めており、その関係で旧家にお邪魔する機会が多いのですが、入れていただいても、玄関かせめて入っても座敷のところまで、ご主人や奥様から話を聞く程度で、トイレまで入っていくとか、蔵の中まで入ってという機会はほとんどないんですね。ところが今回、こういう形で植田さんから丸ごと家屋を提供していただき、どこへ入ってもいい、何を見てもよいというようにしていただいたのは、ちょっとでき

ない経験です。そういう意味で私自身もこの機会に、少し勉強させていただきたいなと思っております。

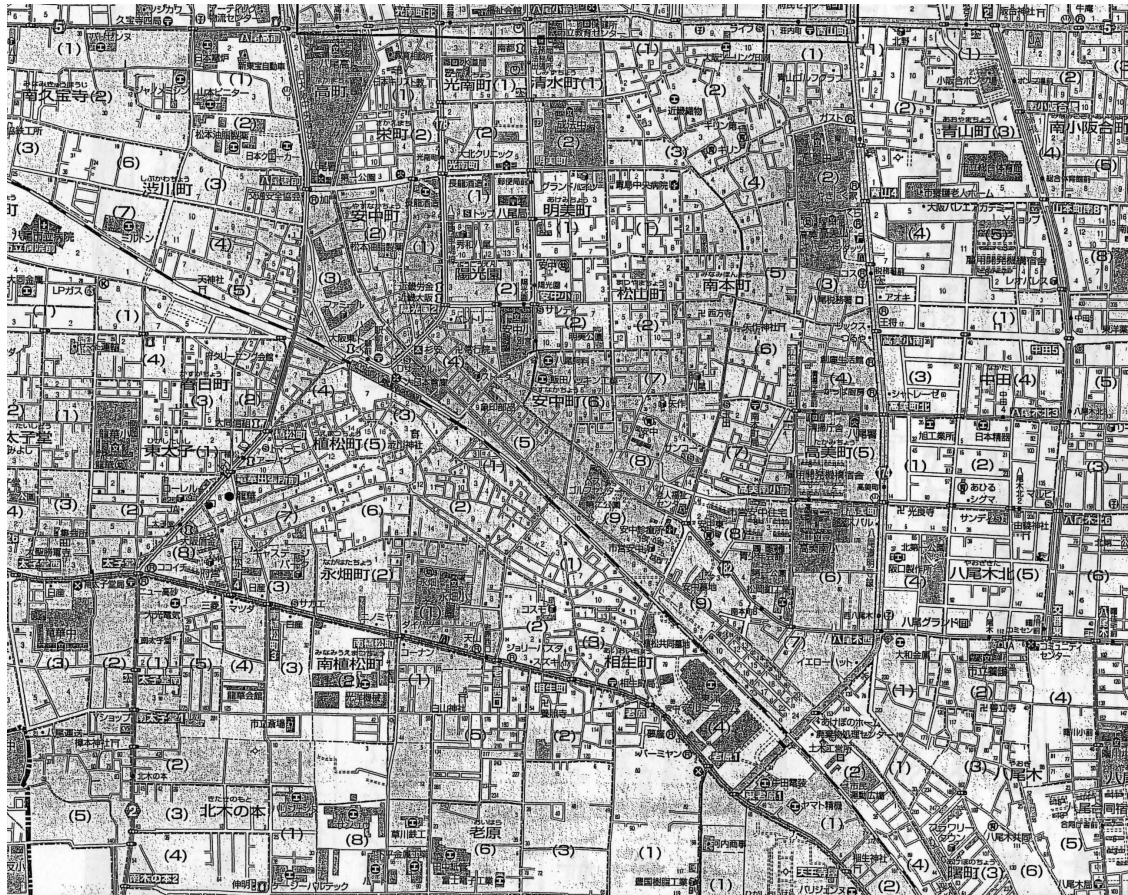
みなさんには午前中、建物を見ていただきましたが、かなり大きなものですよね。それから熙連伊さんの話は、身体にまとうもの、織物の話で、これも目で見てわかるものです。それに対し私の話は、どちらかと言えば植田家の人々の「頭の中」をですね、ちょっと覗いてみようかと思うんですね。そういう意味で、建物や体に身につけるものとは違って外から見てたらわからないが、ひょっとしたら、この植田家に住んだ人たちの頭の中をのぞけるかもしれないというものです。

例えばいまNHKテレビで「芋たこなんきん」やっておりますけども、あれを毎日見てる人と見てない人では「頭の中」が違うんですね。私は毎日、見ます。「ちゅらさん」も毎日、見ていました。それが私の「頭の中」なんですね。そういう「頭の中」を覗くチャンスというものが、ひょっとしたらあるのではないかということで、後半には、そういう話をしてみようと思っております。

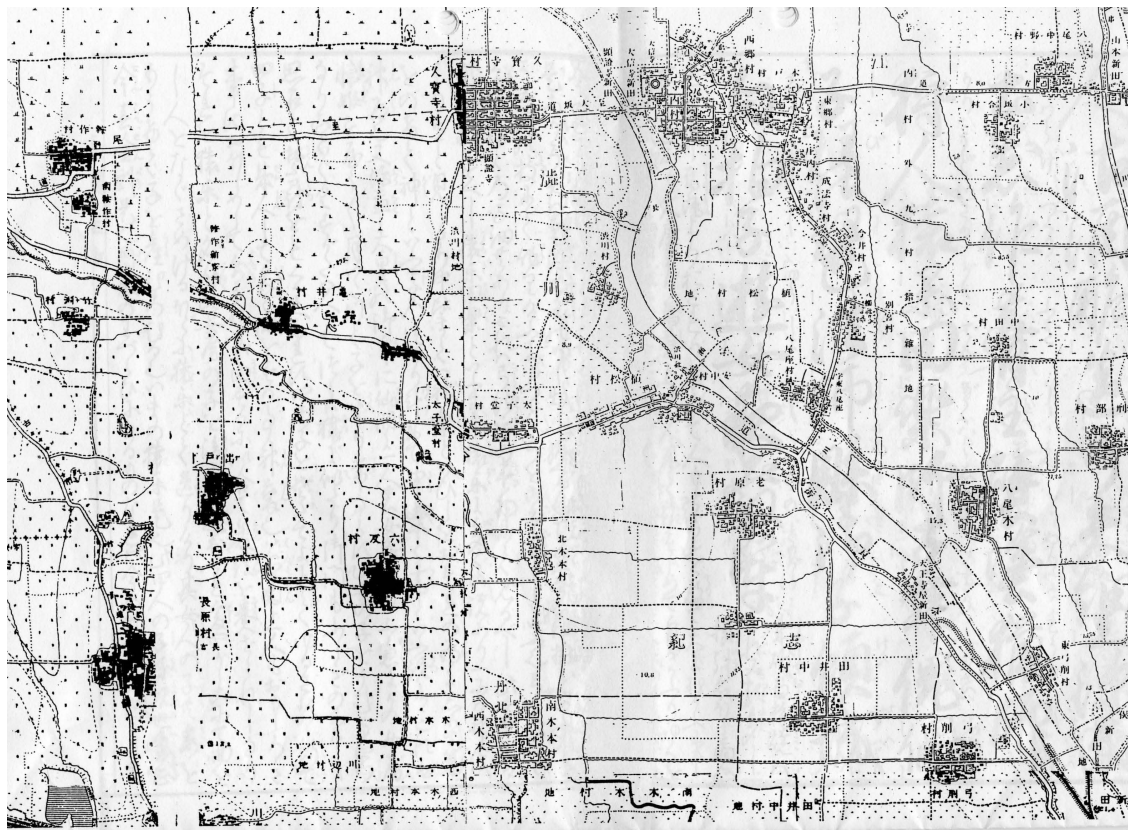
「学芸」という堅い題がついておりますけども、450坪のお家の中で、植田家の人々はほぼ240年間近く、お住みになってきたわけですね。「塵も積もれば山となる」と申しますけれども、その間に、この屋敷の中にはたくさんの塵が積もっております。この間、学生諸君が夏休みの暑い盛りに、5日間ほど連続して植田家文書の整理と調査をしてくれましたが、その連日、屋外でマスクして塵はたきをやってくれました。まさに古文書に塵が積もってるんですね。それを読む前に、まず塵を落とさなきゃならない。こうしてきれいになった古文書の中から、この家の人たちの「頭の中」を覗いてみたいということですが、それも中途半端な話になるかと思えます。まだ去年から始まったばかりの調査・研究ですので、追々、修正させていただきたいと思えます。ご了解ください。

1. 安中新田と植田家

最初は植田家住宅のある安中新田の話を行います。そのために地図を入れてあるかと思えますが、植松の地区の方々に、現在の地図（【図版1】）



【図版1】現在の安中周辺



【図版2】明治前期ごろの安中周辺（清水靖夫編『明治前期・昭和前期大阪都市地図』柏書房 1995年 所収）

を見ていただいても、どこが新田なのかわかりません。ところが、【図版2】を見ていただくと、安中新田というのがいかに細長い変わった場所であるかということが一目瞭然なんです。

植松とか、あるいは八尾の寺内とか、老原とか、そういう所は、江戸時代よりも少し古く、室町時代ぐらいにはおそらく集落ができていたと思われる。熙連伊さんのご主人に小谷利明さんという学芸員の方がおられますけれども、小谷さんは、南北朝から戦国期の専門家で、その論文などを読ませていただきますと、旧大和川の河川敷は、よく合戦の舞台になったという話が出てまいります。田畑でやりますと作物が荒れてしまいますからね。ですから河川敷でやるわけですね。昔の川はよく氾濫し、その分、河川敷が広いわけですから、そこで合戦をしたというのです。それが長い間、河川敷として放置されていたのが、宝永元（1704）年に旧大和川が付け替えられることによって耕地化されていくわけですね。旧大和川筋の玉串川とか長瀬川の周辺は、つぎつぎと新田化してまいります。大きなものは深野池を干拓した深野新田とか、みなさんもご存知の鴻池新田でございまして、安中新田とか天王寺屋新田、顕證寺新田などはそのような河川敷にできた新田です。

河川が氾濫しますと蛇行しますよね。その氾濫部分が河川敷を形成し、放置されていたところを、付け替えによって河川の幅が狭まったために、河川敷が耕地化できるわけです。そういう形で新田をつくってまいります。新田は必ず河川敷、あるいは自然堤防の上に開かれていますから、かつての河川敷を確かめようと思うと、長瀬川でも玉串川でもいいのですが、横切って歩いていただくといいんです。

私は以前に数年間、山本新田の端っこのところにあります西山本というところに住んでおりました。私の家は、北上する玉串川から西に下がったところにあるんですね。ですから、玉串川を渡ろうとしますと、必ずちょっと土地が上がるんです。そしてまっすぐ行きまして、川を渡って、御野縣主神社のところを過ぎ、東山本に入るとまた下がるんです。川を中心に台地を思い浮かべていただくといいでしょう。そういうふうには、河川敷に

きた新田というのは歩けばわかります。大和川が付け替えられ、その結果、狭まった河川の河川敷を開拓してできたのが新田だという、ひとつの証拠ですね。

それからもうひとつ、私が西山本におりましたときに、東大阪市の玉串というところにお住まいになっておられた政野さんという知り合いのご婦人のところへ、よく子供たちと自転車でまいりました。玉串への道は、玉串川の左右兩岸のどちらかを走っているんですが、それは要するにそこが自然堤防で、その上に道ができていたというわけです。しかも面白いことに、その堤防は河川面よりもかなり高いところに築かれており、道を通っていると、そこには必ず墓地があるんです。例えば万願寺村の墓地や、福万寺村の墓地が道の傍にあり、玉串に行く間に次々と通って行くわけですね。さらにその墓地の傍には大きな榎があったり、大きな楠があったりする。堤防の護岸を強くするために植えた木なんですね。それが200年、300年とすごく大きくなって、一番有名なのは門真の古川という川沿いにある榎で、大阪府の指定を受けている樹木があります。古川の堤防の上にどーんと立っているんです。

そういうふうにして人々が川と一緒に暮らしてきたところ、江戸時代の宝永元年に、大和川が現在のように西へ付け替えられ、旧河川筋は川幅が狭くなって、その周辺を開いてよろしいということで新田になったわけですね。もちろん幕府には、新田から収益が入ってまいります。また、ここに投資した人たちには小作料が入ってまいりますから、多くの人が新田開発の入札に参加いたします。ここ安中新田は、安福寺さんという柏原市国分にあるお寺さんがオーナーになるんです。ちょっと変わってます。鴻池さんがオーナーになったから鴻池新田と言いますが、安福寺さんが中心になった新田だからということで、安中新田という名前がついたのではないかとされています。

一般的に新田を開いた後に、幕府は検地をします。検地をした後は、年貢を納めなきゃならないんですが、それまでは開発期間ですから、「鍬下年季」と言って、仮に作物がとれても年貢はかけないという特別期間で、だいたい3年から5年あると言われております。しかし検地をいたします

と、そこから先は収穫が少なくとも年貢を納めなきゃならないということになります。

安中新田の場合、検地帳には、安福寺さんをはじめ12名の名前が土地所有者として載っているんですが、安福寺さんは、畑の実数291筆のうち131筆、ほぼ4割5分ほどを持っておられます。それ以外は八尾の慈願寺さんとか、植松の個人の方も参入しておられます。その意味で、鴻池新田のようにひとつの家が開発したんじゃなくて、安福寺さんを中心に何人かの人が寄り集まってきて、開かれてできた新田なんですね、ここは。

新田の石高は、享保6（1726）年の検地の時期がピークで、470石というふうになっております。江戸時代の村から言うと、ほぼ平均的な村の大きさです。植松は大きいですから、この倍近くありますけども、安中新田は470石、町歩数にしますと47町歩という規模になっております。当然のことながら、河川敷の新田ですからみんな畑です。また植松のように集落が真ん中にある、周囲に田畑がひろがるという形をとりません。新田を耕している人は、自分の住んでいる場所から通ってきますので、新田を開いても必要な建物は1ヶ所しかないんです。新田会所さえあればいいんです。新田会所っていうのは庄屋のお宅みたいなもので、年貢を納める時に絶対に必要なんです。植田家は、その会所が元になっています。

そういう意味で、新田というのは文字通り田畑を耕すためにだけできたものなんです。そこに人々が、会所を中心に次々と入ってくることで、徐々に集落になるんですね。享保6年の検地帳では、先程いいましたように畑が291筆あるんですけど、屋敷はわずか15筆しかないんですね。その中でも安福寺さんが3筆持っておられます。この検地帳を繰り返すと、291筆のうち、小字の名前が26出てまいります。たとえば出口とか、西脇とか、切堤きりつととか、長堤とか、柳原とか、中河原とかで、これらは名前から判断できるように、普段ならば作物を作らず放置されている場所です。切堤きりつとなんていうのは洪水で堤が切れていた場所で、中河原というのは川の中にあつた場所なんですよ。そういう地名、小字というものが26あります。今日、植田さんにお聞きすると、このお宅の小字は森続もりつぎという字だそうで、検地帳

を見ると森続には畑が10筆で屋敷が1筆ございました。その1筆が安福寺さんの持ち家がありますので、それが会所ではないかなと思います。

つぎに先程の地図の話に戻ります。以上の話をもとに【図版2】を見ていただきますと、安中新田というのはどこからどこまでかが、すぐにおわかりになると思います。地図の右隅から北の方に奈良街道に沿って、長瀬川が流れているのがおわかりになりますよね。地図のやや右下をみると、八尾木村のすぐ左下の川沿いに天王寺屋新田がありますよね。そこから1kmほどザッと川に沿って北上して下さい。そうすると、久宝寺村があり、その右に顕證寺新田がありますね。この顕證寺新田から、先ほどの天王寺屋新田までの間、長瀬川に沿った両側が安中新田なんです。

こうした新田からは年貢が上がってくるので、例えば鴻池新田会所には大きな蔵が3つあります。文書蔵を入れると4つあるわけですが、それらの蔵は、年貢の収穫期になったらお米を集めさせて、俵になおし、年貢として収納するわけですね。それと同じ役割を、この安中新田の植田家の元である会所がするわけですね。新田では、会所の役人を普通は「庄屋」と言わずに「支配人」という言い方をします。そこ全体を支配するマネージャーですね。後には他村並みに庄屋という言い方をしてくるようになりますけれど、当初は支配人です。そういう支配人として、植田さんが、新田ができて100年ぐら経ってから入ってこられるわけですね。その意味でこのお家は、いわば安中新田のシンボルなんですよ。

今日、この家に入られた方はおわかりになると思うんですが、仮に470石で年貢をとったとしますと、五公五民であっても200石ぐらいの年貢がとれるんですね。もしそれを全部米で納めたら俵数がいくつで、この生活器具を入れてある2つの土蔵に入るだろうか怪訝に思われた方もおられるでしょう。それは無理です。ところが安中新田では米を作らないから、大きな蔵は要らないのです。全部綿を作るわけですから、綿はみんな売ってしまいますので、年貢は銀で納めたらいいんです。ですから鴻池新田のような大きな米蔵は要らないのです。

江戸時代の終わりの年期をもつ検見帳という資

料がありますけれども、その帳面を見ると、ここは木綿を作っているんですね。先程の熙連伊さんの話にあったように、綿は全部換金させて銀で納めますので、この蔵の中にお金が入ることがあっても、米が入ることはなかったんです。それがこの新田会所の蔵の小ささを証明している、というふうに考えていいのではないかと思います。

この新田に住んでいた人たちは、徐々に増えてくるようであります。例えば享保6年には屋敷数が15筆というふうに申しあげましたけれども、江戸時代の終わりになりますと、かなり家数も増えてきて、安政5（1858）年には32軒の家が建って、120人が住んでおられました。要するに、どんどん畑を潰して屋敷にしていくということで、集落ができ上がってくるわけですね。

さて植田さんは、ご先祖が宝暦12（1762）年に、この新田に入られたということが史料からわかっています。これは去年から今年にかけて、学生・院生諸君や資料館の人たちが調査してくれたことによってわかったことです。この新田に入られたきっかけは、最大の地主であった安福寺さんの誓眷上人という人の縁で、「御寺のかし付田地諸勘定向取締」のために入ったと史料に出てまいります。お寺が、どうして新田の地主になるんだとみなさん思われるかもしれませんが、実は今と一緒に、お寺さんというのは江戸時代も法人税がかかりませんから、お金を持ってはるんですね。しかも安福寺さんは、尾張徳川家の保護を受けておられ、大坂では名刹と言っているくらい由緒あるお寺なんです。尾張の殿様がスポンサーとしてついているわけありますから、お金があるんですね。お金を持ったらどうするかと言うと、もちろん金を貸すんですね。金を貸したら、当然のことながら返しますよね。普通の町人から金借りても踏み倒しますけど、お寺さんからお金を借りて踏み倒したらバチが当たりますよね。そういうのを「祠堂金」と言います。あるいはうちの寺のお堂が壊れたから何とかしてほしいという、みんな無担保で貸してくれるわけですね。そういう意味でお寺というのは、鴻池なんかと並んで、投資の主体になれるわけですね。

しかしながら、お寺のお坊さんは商才に長けているわけではございません。顧客の管理とか、マ

ネージメントができるわけではございません。そうすると、そこは「蛇の道は蛇」じゃないですけど、商いの道は商いに長けた人がいいだろうということで、おそらく植田林蔵と呼ばれたんじゃないでしょうか。

植田家の系譜によりますと、植田家はもと大和国田原本の藩士平野権内に仕えた梶尾勘兵衛と称しているとあります。しかし江戸時代は、先祖は武士から興った家であるという言い方をみんなします。それが江戸時代という「武士の世の中」の常識なんです。しかしそれは出自を武士に持つというだけの話で、本当かどうかというのは、あまり意味をもたないことだろうと思います。むしろはっきりしていることは、この植田林蔵という人は、かなりの商才を持った方、あるいは経理に明るい方だったのでしょう。だからその才能を見込まれてこの新田のマネージャーとして招かれたと、私は理解をしております。これは後で触れますが、植田家の人々の頭の中を覗く時に興味深いのは、出自が武士だというふうに言いながら、実はかなり商才があったということですね。自分の家の系譜としては武士でいきたいわけですが、実際は商いをやっているわけですね。実際、この家の暮らしは武士的だったのか、商人的だったのかということは、その頭の中を覗いてみると、少し見えてくるのではなからうかと私は思います。

なお植田林蔵が入るまで、安中新田は誰が管理していたのかという問題がありますが、これについては、『河内どんこう』という雑誌の中に、ご当地の山野としえさんがお調べになった論稿があります。それによると、林家や辻田家、中務家などの諸家が管理されていたようでもあります。しかしながら、もうそれらの家は途絶えておりますので、本日は植田さん以前については触れません。

2. 植田家の人々と学芸

先ほど、植田さんは1760年代に当地に入ってくると申しました。そうしますと、その後、およそ240年ここにお住みになっておられるんですね。関西大学は今年、創立120周年と言っているんですが、その倍です。この空間の中で、240年の歳月が一日一日と重なっていくのだと考えますと、僕は歴史を研究している人間として有難さ

を感じるんですね。人というのは誰しも、一日一日しか日を重ねられないんですね。どんな素晴らしい人でも、十年いっぺんに年をとることはできないんですね。その歳月が、この屋敷のなかに240年分、たまりたまつたと考えるということは、ある意味で言うと、今回の調査は、浦島太郎が玉手箱を開けるようなところがあるんですね。そういう楽しみが、この空間には詰められている、というふうに考えてみていただいたらいいと思うんです。

宝暦12(1762)年に入ったのが初代の林蔵という方だと考えますと、明治維新の頃の当主は5代の一郎になります。初代の林蔵は、宝暦から寛政年間、みなさん御存知の人で言うと、田沼意次とか松平定信の時代だと考えて下さい。それから、2代林蔵さんは天保5年に亡くなっておりまして、將軍家斉の時代、文化・文政期だと思っていたかといいでしょうか。3代の林蔵さん、これは4代の市太郎さんと兄弟でして、この兄弟はかなり有能だったようで、この二人の時代以降、資料もかなりたくさん残ってまいります。二人とも文政から天保ぐらいに生まれておられます。したがって、天保改革の時期ぐらいに成長期を迎えられた人だと考えてみていただくといいでしょうか。まずお兄さんが庄屋になって、後に弟の市太郎が庄屋になる。そしてこの市太郎さんが明治維新を経まして、5代目の一郎にバトンタッチして、この人が明治・大正を生き抜くという形になります。このうち、比較的当時の様子が資料によって見えてきたのが、4代の市太郎と5代の一郎の親子でございます。これから、この二人の時代のお話をちょっとしてみようかと思えます。

私は常々、当時の人々のことを知るのに一番いいのは「日記」だと思っているんですね。ですから日記があると一番いいんですが、今のところ残念ながら、植田家の資料の中では日記が見つかっておりません。それからもうひとつは「手紙」ですね。その人間がどういう考えを持っていたか、誰と親しかったかなど日常生活の一齣を何気なく表現してくれるのは、手紙ですよ。例えば朝6時に起きた、普段は遅いんだけど今日は早く起きたと書いてありますと、ああこの人は朝が弱かったんやな、僕みたいだな、ということがわか

るわけですよ。そういう意味で、日記とか手紙というのは、何気ない情報を教えてくれるんですが、今のところはまだ日記については見つかっておりませんし、手紙の整理はもっとこれから時間がかかることであります。

そうすると、手紙や日記を抜きにして、人々の頭が何で覗けるかと考えました。植田さんだけに見えるような特色は何なのかということを考えて時に、ひとつ思い当たりましたのは本です。書物なんですよ。植田さんは、こちらの蔵に大変たくさん書物を集めておられます。書物の整理の方は、私共の研究員の松本望が中心となって進めております。そして、この整理はほぼでき上がりましたので、これからお話しするのは、その書物の整理の中で出てきた話でございます。どんな書物があるかというのはこれから少し紹介いたしますが、実はかなり多種多様にございます。しかも240年の間、植田家の人々はつぎつぎと本を集めてこられたわけですね。

例えば、私の家へ行きましても、私がどんな人間なのかということは私の本棚を見たら少しわかるわけですね。堅い本も置いてありますけど、その中にNHKで放送されていた「チャングムの誓い」の本が3冊セットで並んでるわけですね。「あ、これ奥さんが読んでるんや」とか、「チャングム好きなんや」ということがわかります。そういう意味で、書棚を覗かれるということは、その人の頭の中を覗かれることにもなるんですね。そういう意味で、私も自分の家を覗くかのようにして植田家の書棚を覗いてみました。

実際に覗いてみると、他の庄屋の家と区別がつかないのは謡の本であります。謡というのは江戸時代の男性が人前で付き合う時のたしなみですから、謡がうたえなかつたら人として認められないというふうに言われております。特に商家であればそうでありました。能・狂言をする人は余程変わった人ですけど、謡は誰でもやります。当時の人は普通にみんな謡好きでありますから、謡の本はどこの家にもたくさん残っております。大坂とかその周辺では、特に江戸時代の後期になると、男に生まれたら謡をやる。また謡をやる副次的効果があるらしいんです。それは方言が直るんですね。方言を直すには謡の文句を口ずさみさせた

らしいというふうに使われているんです。

ところで、私が謡の本以外で注目したのは、ひとつは「往来物」です。この家には、往来物が実にたくさんあるんです。「往来物」というと「庭訓往来」があります。みなさんにお渡ししたプリントの中に「庭訓往来」の一節を入れておきました。「庭訓」とは、庭で教えるということですね。【図版3】をみていただくといいかと思いますが、これは『庭訓往来』の写本です。「庭訓往来」は、江戸時代の人たちが男も女も勉強をしようと思ったら、まずこれから教えられたテキストだと考えてください。後で少し説明いたしますが、この「庭訓往来」のはじめ、「春の始めに」という句ですね（【図版4】）、これは南北朝の時代にすでに成立しています。この本は手紙、「往来」ですから往く手紙と来る手紙ですね、その文例が収められています。この「春の始めに御祝い貴方に向かい先

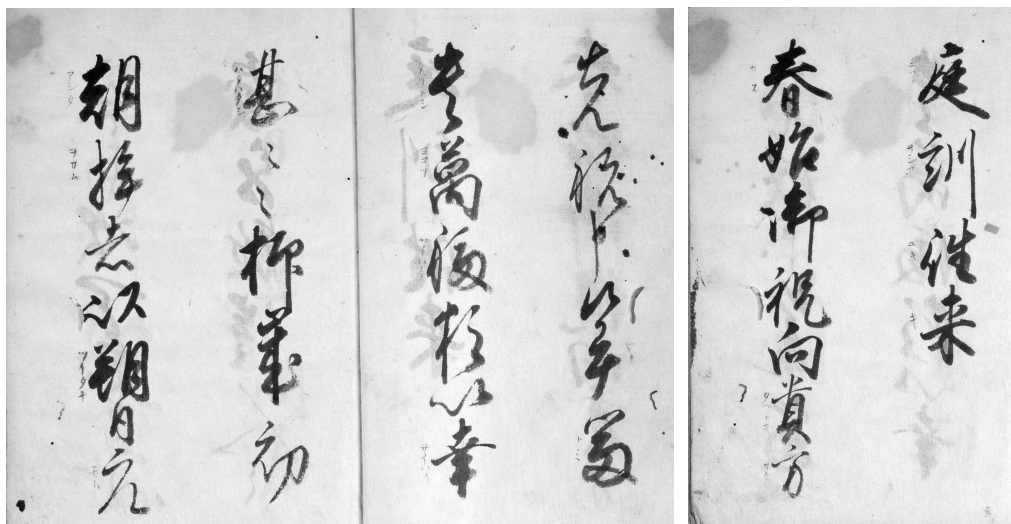
ず祝い申し候おわんぬ」というのはこちらから出すお手紙です。それに対してお返しの手紙がまいります。これを12ヶ月分収めてあるんですね。ということで、これを勉強すれば、12ヶ月の手紙が書けるわけですね。今で言う手紙文例集だと思っていただけたらいいと思います。

もうひとつは『商売往来』ですね（【図版5】）。すごいでしょこの手垢。もう、何人の人がこれを読んだでしょうか。普通、本の後ろには刊記つまり奥付が載るんです。『商売往来』の場合、出版者が最後の丁の左隅にしか書いてないんですね（【図版6】）。これは書誌学的には「半紙本」という小さな本です。『女大学宝箱』と比べていただきますと、サイズの違いがよくおわかりになりますね。謡はこれよりもさらにもうひとつ小さい本なんですが、この『商売往来』はおそらく、植田さんの書庫の中で一番古い本のひとつではないかと思うんです。『商売往来』というのは、江戸時代の大和川付け替えができた頃、宝永年間から享保年間にできたと言われています。ところが作者も出版者もわかりません。要するに商売をやる人たちが何を知っていたらいいかということで、「凡商賣持扱文字員数取遣之日記（およそしやうばいもちあつかいもんぢぬんじゆとりやりのにつき）」で始まります。商人にとっては何が重要なのかについて、漢字で書いてあります（【図版7】）。

後でも触れますが、京都大学の教授で中国学の権威だった内藤湖南という人は、『庭訓往来』と『商売往来』を指して、「日本人が中国の直輸入の教科書からはじめて離脱して、国語で書いた日本人向けの教科書はこれに始まり、これに完成する」



【図版3】写本『庭訓往来』



【図版4】写本『庭訓往来』冒頭



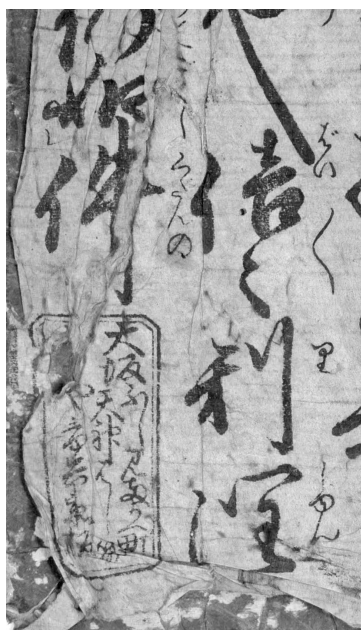
【図版5】『商売往来』



【図版7】『商売往来』冒頭



【図版6】『商売往来』刊記

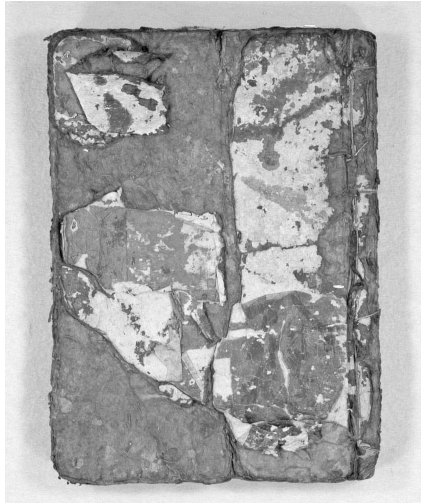


(拡大)

と書いています（『日本文化史研究』下）。南北朝時代に始まって、江戸時代の享保年間に『庭訓往来』や『商売往来』ができてくる。その後、これらのまねをして『職人往来』や『百姓往来』だとか、それぞれの身分別のものが出てくるんです。この『庭訓往来』と『商売往来』は数百年にわたって日本人が手にし、手垢を付けて読んだのだらうと思いますが、植田さんには実は、この『商売往来』の異本が多いのです。明治になると『開化商売往来』ということで、明治時代の文明開化に合わせたような『商売往来』も出てくるんですね。植田さんの蔵書を見たとき、日本人が平均的に受けた教育の流れというものが、辿れるのではないだろうかというふうに思ったんです。

もう一つは、私は女性史を研究しておりますので、植田家の人々といったら男もいるけど女もいるだろう、植田家の女性はどういうふうにして育てられたのだろう、これを探ってみたいと考えました。僕が植田家をやりたいのは、実はそれが目的なんです。男性のことはどちらでもいいんです。女性のことを知りたいんです。女性のことこそ知りたいんです。

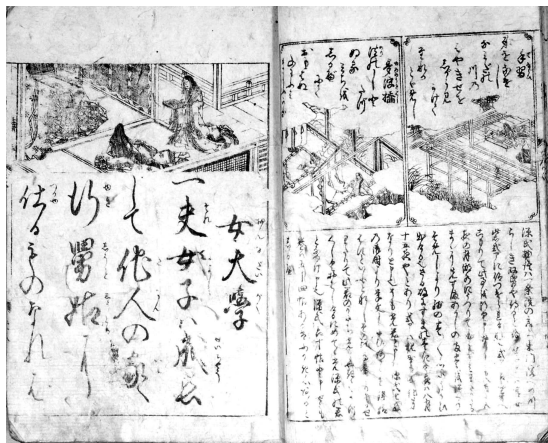
この本表紙だけみると、はがれて何と書いてあるかわからへんでしょう（【図版8】）。しかし開けますとね、『女大学宝箱』なんです（【図版9】、【図版10】）。貝原益軒が作ったとされています。江戸時代の日本女性の最大のテキストとされた本がこれなんです。これだけ厚いんですよ、見て下さい。女に学問は要らん、と言いますけれど、『商売往来』の方はこれだけ薄くて済むんですよ。江戸時代、「女性は無学文盲がよし」という意見が



【図版 8】『女大学宝箱』表紙



【図版 9】『女大学宝箱』見返し・扉



【図版 10】『女大学宝箱』冒頭

ありますけども、そんなバカなことはありません。『女大学宝箱』1冊読もうと思ったら、『商売往来』より文字が多いんです。

『女大学宝箱』の一番後ろには「女中の見給

ひて益有書物目録」、つまり女性が読んだら為になる書物にはこんなものがありますよ、ということで書名がずら一っ書いてあります（【図版 11】）。これをご覧になって、江戸時代の女性の教育というものを見直していただきたいと思うんです。これらが全部こういう形で本として提供されるわけです。お金さえあれば買える。仮にお金がなくとも、少しのお金があれば貸本屋から借りることができるわけですね。安中新田では植田さんとこ行ったら読ましてもらえないか、ということになるわけです。

このようにして女性向けの本が、生まれたわけです。ところが、これらの本を何人の女性が読んだかについてはわからないんですが、多くの女性が読んだことは、明らかなんです。私にとって初めてのことだったのですが、植田家には『女大学宝箱』の版の違うものが3冊あります。ですからこのお宅は、女性教育をやっておられたに違いないと思っています。だから今後、女性の書いた史料が出てくるのを楽しみにしています。

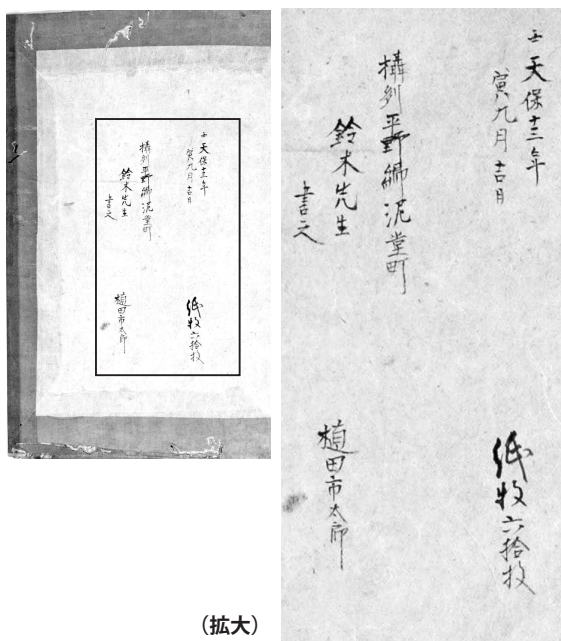
ただし、この家はひよっとしたら寺子屋の師匠であったかもしれない。私塾の先生であったかもしれない。そうすると『商売往来』も1冊だけじゃなくてたくさん持っていてもいいわけですね。

植田家では、男の子であろうと女の子であろうと、子供が生まれると幟をたてて祝うと同時に、『庭訓往来』や『女大学宝箱』を読ませて教えていたかもしれない。そうすると子どもの生育過程というものが、こういう書物から見えてくる。それが往来物というもののすごさんですね。

そこで次に生育過程を実際にたどってみたいと思うのですが、材料として『庭訓往来』を用いてみたいと思います。『庭訓往来』はもっぱら版本が多く、それで勉強いたします。だからこれだけ汚れるわけですね。そして御存知の方もおられると思いますが、文字あるいは書道のテキストであると同時に、そこに音とか訓が振ってありますから、漢和辞典と国語辞典の役割をするんです。さらに商売用のビジネスの知識が入るわけですね。女性のもも同じことです。『女大学宝箱』には、最初に農業の風景が書いてあります。男であろうと女であろうと、お米はどのようにしてできるかは知っていなきやならない。さらに開いていくと、



【図版 11】「女中の見給ひて益有書物目録」



(拡大)

【図版 12】写本『庭訓往来』奥書の書込み

今度は「源氏物語」がダイジェスト版で出てくる。つまり往来物というのは、要するに百科事典に近いと考えていただけたらいいでしょう。

「庭訓往来」の本文を見てみると、例えば、男という字は「おとこ」とも読むし「なん」とも読

むと書いてあるんです。そういうことが理屈じゃなく、読んでいくとわかるわけです。ですから、往来物というのはそれこそ、使い方によってはいくらかでも教育効果が発揮できるんです。

植田家には『庭訓往来』の版本がたくさんあるにも関わらず、写本も1冊あるんです。写本というのは、本の内容を書き写したもののなんですね。しかもこの写本を開けてみますと、非常に丁寧に書いてあるんです。これを最後まで見ますと、最後の奥書のところに、「天保十三年寅九月吉日」「紙数六拾枚」「撰州平野郷泥堂町鈴木先生書之」と書いてあるんです。そして下に「植田市太郎」とあります（【図版 12】）。要するにこれは、平野郷の鈴木何某という、寺子屋か私塾の先生かどうかわかりませんが、その先生が、版本で勉強するよりも手書きの本で勉強する方がよいだろうと、わざわざ市太郎君のために書いて渡したテキストなんです。この世に1冊しかないテキストなんです。ところどころに落書きがありますが、それはたぶん市太郎君のものではないかと思えます。その一つに、龍の絵が描いてあります（【図版

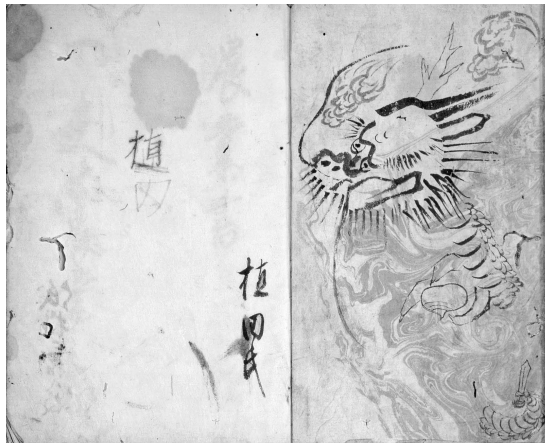
13])).つまりこの写本は、先生と生徒の間を行き来した書物なんです。

この写本の『庭訓往来』が面白いのは、通常は「春始御祝」から始まるんですが、この本には一番最初に「農業書」が書かれてあるんです。「一、夫れ生まれ農業之家の輩は、幼稚之時より農人の風俗を見習い」と書いてある(【図版 14】)。すこし言葉を足しますと、「庭訓往来」の示す教養は、別に職業は関係ないんです。人として生まれたらこれを勉強しなさいという書物で、いまの大学で言う一般教養のようなものです。ところが江戸時代の社会は身分制の社会ですから、商売人は商売人のことを教えなきゃならないし、百姓は百姓のことを教えなきゃならないわけですね。ですからこの鈴木先生は、「お前は安中新田の農家に、田舎に、村におるんだから、生まれた以上は農として、この心得を身に付けなさい」ということをわ

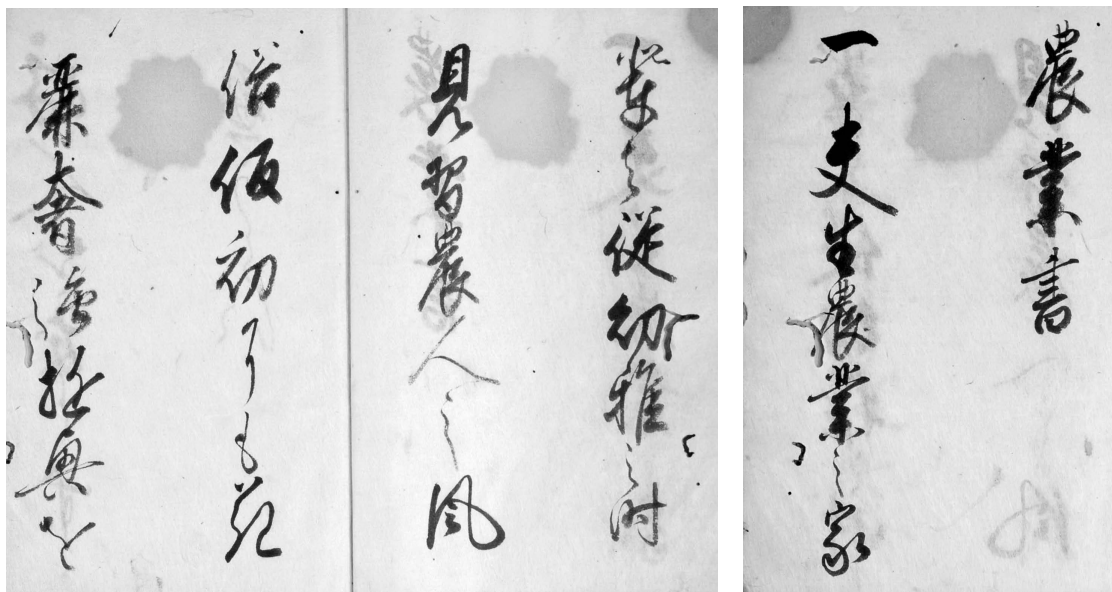
ざわざ書いてくれたんです。そういう前書の入った『庭訓往来』です。

さらにめくりますと、途中から日付が入っているんです。「中間」の左方に、「卯正月廿九日」って書いてあるでしょ(【図版 15】)。最後の奥書から、この本を市太郎君がもらったのが天保 13 年寅 9 月だということがわかります。したがって卯というのは翌年ですね。要するに、市太郎君が勉強した日にちをこうのように書いているのではないかと考えられるのです。この本の中には、そういう日にちが何箇所か入っています。言い換えると、家で毎日毎日勉強をやっていったのではなくて、先生がお宅に来られて、「はい、今日はこちらからここまでやりますよ」と先生に読まされて、終わり、「次は何月何日来ますから」、ということで、またそこから始める。そのときにこの日付を書いていったのではないかと、というのが私の推測であります。つまりこのテキストは、一面、子どもの学習過程を示すものだということになるんですね。

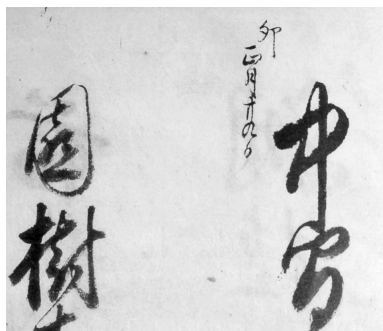
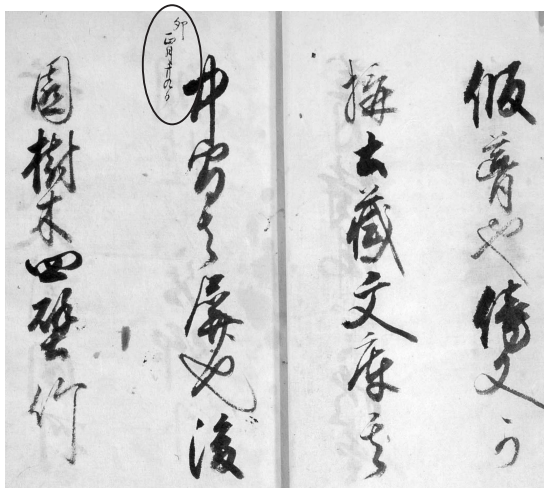
学習過程は、最後のところで終わればよかったんですが、このテキストは、【図版 16】で見られるように「琵琶法師縣神子」で終わっているんです。これが「庭訓往来」の途中であることは、【図版 17】からわかります。舞妓とか傀儡とか田楽とか、さまざまな職人の人がリストアップされている部分に続いて、「縣神子」というのが出てくる。手持ちの資料【図版 17】の前から 4 行目にあり



【図版 13】写本『庭訓往来』龍の絵

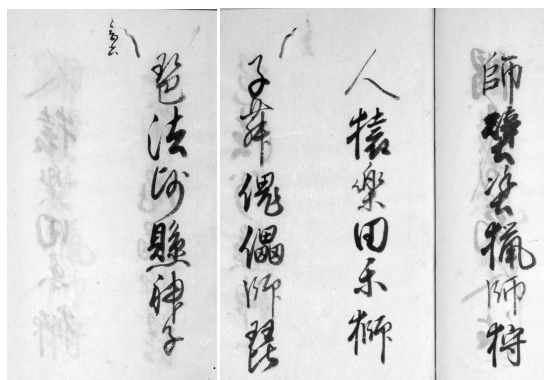


【図版 14】写本『庭訓往来』の「農業書」



(拡大)

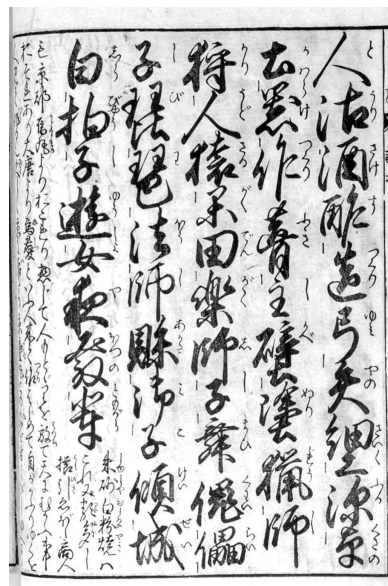
【図版 15】写本『庭訓往来』中の日付記入例



【図版 16】写本『庭訓往来』巻末

ますよね。ここで終わっているんです。ということは、この写本の『庭訓往来』は最後までいかに、先生が匙を投げたか、市太郎君が嫌いになったか、なんらかの理由で学習は途中で終わってしまったことを意味します。本1冊で、なかなかすごいことがわかんと思いませんか。したがって児童の学習過程をしめす史料として、この写本はお宝のひとつにしたいと思うものです。

この市太郎君は、長年、八尾で教育史の研究をしてこられた森田康夫先生によると、植松の松林寺のところにあった菅蘆舎で学んだということで



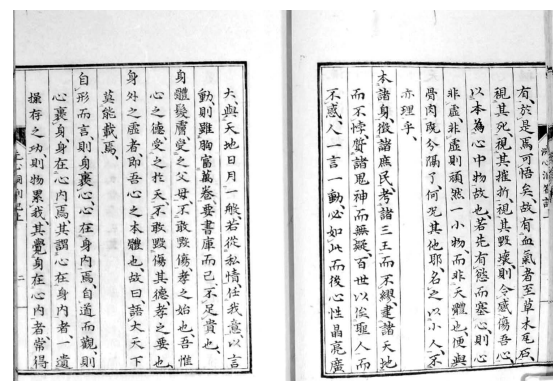
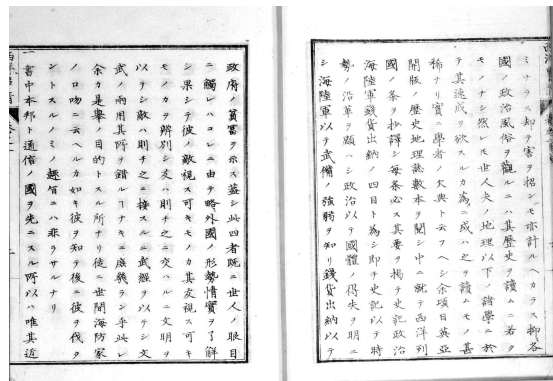
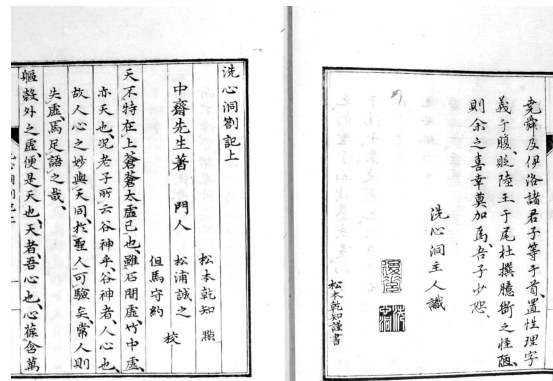
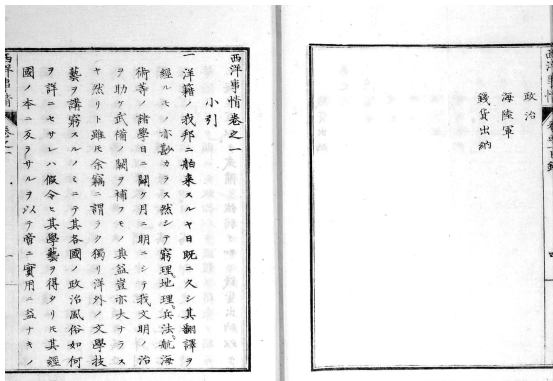
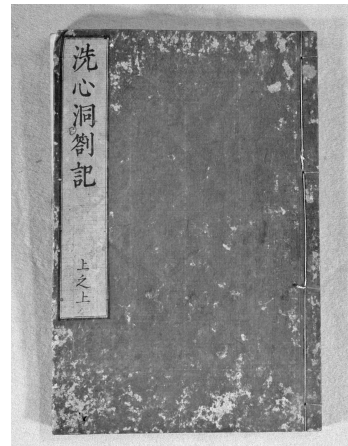
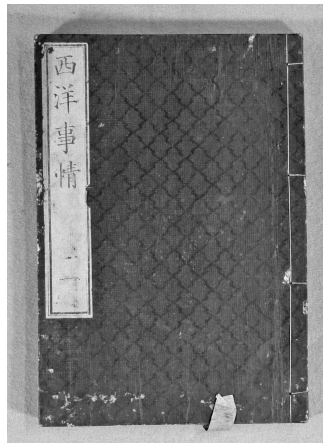
【図版 17】『庭訓往来絵抄』の部分

あります。現在、記念する碑が建っております。ですから、市太郎君は初等教育を終え、中等教育まで進んでいたということがわかります。

5代目の一郎さんについては、もっと時間をかけて研究する必要があるかと思ひます。おそらく植田家のキーパーソンだと言つていいだろうと思ひます。

まずは『日本教育史資料』に、この方は寺子屋の教師として出てまいります。隆盛期は明治5(1872)年で、生徒が30人いたと書かれています。さきほど私は、これだけの往来物があるのは、この家では教育が盛んであったというだけじゃなくて、他人に教育を施そうとされていたかもしれないと申しました。他人に教育を施すためには、まず誰かから教育を受けるわけですね。それを順繰り順繰り広げていくわけです。そういう意味で言えば、他人から教育を受けた段階から、今度は自分が、そのお返しを他人にするという意識が植田家にあったのではないだろうか。そのために、往来物は何度となく使われたのではないだろうか。それが、この往来物の激しい使われ方に現れているのではないかと思ひます。

それに対して、明治期の一郎さんの時代になりますと、文明開化期ですから例えば、福沢諭吉の『西洋事情』があります。あるいは植木枝盛の『民権自由論』という本もあります。『民権自由論』はちょっと傷んでいたんで、ここに福澤諭吉の『西洋事情』を持ってきましたが、きれいで



【図版 18】『西洋事情』

【図版 19】『洗心洞劄記』

ね。あまり読んでないでしょうか。先ほどご紹介しました往来物と、使われ方はまったく違いますね（【図版 18】）。

京都大学人文研究所の横山俊夫という方が、『節用集』という百科事典を研究されたんですが、その調べ方が面白い。普通、本をめくると手垢がつかますよね。これを全部調べて汚れ、損傷している頻度から、その本のどこが一番よく読まれたかということを探り当てようとされたんです。皆さんお宅に『広辞苑』があると、手垢の付いたところはよく引いたところで、それは限られているでしょう。一度も引かなかつたら、手垢がつかませ

ん。つまり福澤諭吉の『西洋事情』や植木枝盛の『民権自由論』は、文明開化の世の中だから買ってはみたものの、ほとんど読まなかったのではないのでしょうか。そういうことも、本が汚れてないことや、朱がほとんど入ってないことから見えてきます。

ほかに植田家には『洗心洞劄記』という、大塩平八郎のたいへん有名な本がありますが（【図版 19】）、これもおそらく1回も触れたことないかというくらいきれいなんです。ところが門真市の茨田郡士をはじめ大塩平八郎の門人たちの家にある大塩の著作には、たくさんの朱が入ってるんで

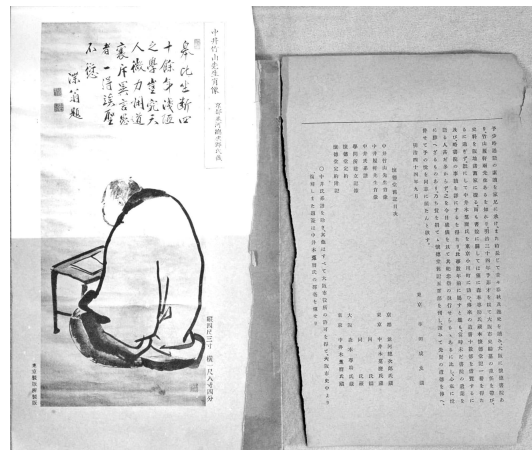
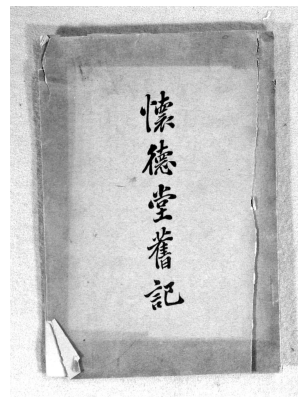
す。実際に読んだという証拠です。だから本を読んだか読んでいないかは、本を開いてみたらわかるんです。読んでない人の本と、読んだ人の本には絶対、違いがあるんですね。つまり飾りとして買ったのか、ほんまに読もうとして買ったのかという違いは、丹念にたどっていけばわかるということになるかと思います。植田一郎さんが、この『西洋事情』を含めて、どのような学習過程をたどられたのかということは、これからの課題だと思います。

ところで、植田一郎のような人物を我々の世界では「名望家」と言っております。要するに豊かな家の資産のお陰で高等教育を受けて成長し、その成果を地域の人々のために返すために、地域の人々にとって難題があれば、中心的な担い手としてその解決に当たる、したがって村長にもなる、みんなに推されたら府会議員にもなる。こういう人たちは各地にたくさん出ます。例えば八尾で言うと、万願寺の久保田真吾もその一人です。

大阪が誇っていた木綿が、インドから入ってくる安い木綿に対する関税を低くされると、全部やられちゃうんですね。それを撤廃させようというような政治運動もおこす。その一人が、植田一郎なんですね。

植田一郎さんはそういった政治活動をし、名望家として地域のために活躍する人なんですが、どのように教育との関わりがあったのかということ調べていったときに気になったのが、明治期の漢学との関わりなんです。私がいま、関心を持っているのは懐徳堂と泊園書院です。懐徳堂は、享保9（1724）年にでき、泊園書院は天保13（1842）年にできるんですが、どちらも大坂が誇る漢学塾です。懐徳堂は明治2（1869）年に潰れてしまいましたが、その後、泊園書院がひとりで頑張って、昭和20（1945）年まで続くんです。

明治期の漢学との関わりについては、植田さんの蔵書にも見えるんですが、八尾市内のあちらこちらに建っている碑にもあらわれています。例えば築留二番樋が明治21（1888）年に、木製から煉瓦製に変わったのを記念して建った碑には、泊園書院2代目藤沢南岳が碑文を書いています。ほかに南岳が碑文を書いたものを探しますと、植松にある、長崎桂齋・司馬太郎親子ですね、この



【図版20】『懐徳堂旧記』

碑文も藤沢南岳が書いているんです。それから万願寺にある、久保田真吾が服部川を改修した碑にも、南岳が詩を書いているんです。その万願寺の碑には、「余、君と交わる二十餘年」と書いてあるんですね。いわば、大阪府下の名望家と大阪の漢学塾泊園書院がピタッとつながっている。

ここに植田家蔵書の中から、『懐徳堂旧記』というのを持ってまいりました（【図版20】）。懐徳堂は、さきほど言いましたように、145年間、江戸時代後期の大阪で全国にその名を知られた学校、知らない人はないというぐらい有名で、適塾なんて比じゃないんです。適塾よりも、この懐徳堂の方が、大阪の学問を語る時にはなくてはならないんですが、明治2年に廃校になりました。その後、復興のためにいろいろと企画され、明治44（1911）年になってようやく復興されるのですが、その際、懐徳堂記念会というものができる。そのセレモニーが、お渡しした「懐徳堂祭典執行次第」（【図版21】）です。

江戸時代後期の大阪の学問的伝統、とくに漢学は明治に入って欧米の教育制度や学問がどんどん

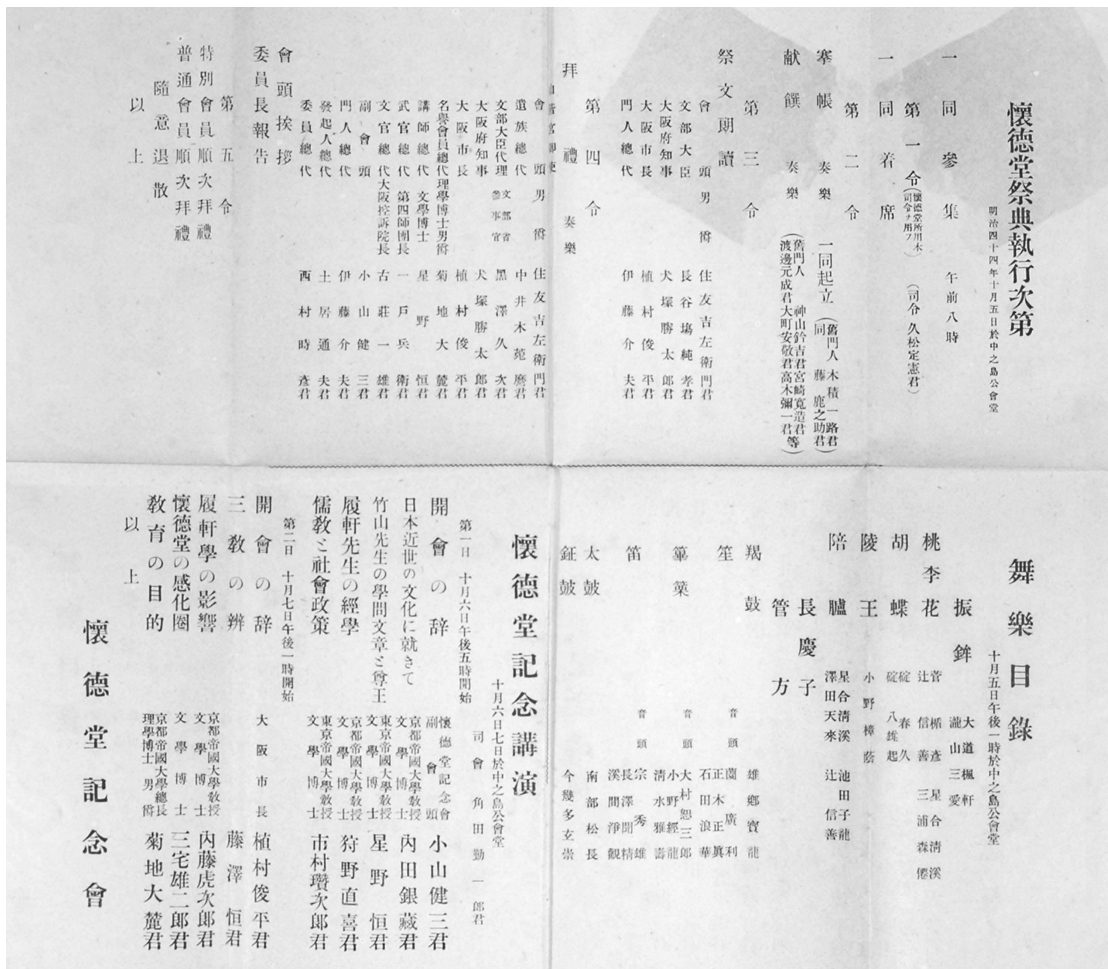
入ってくることによって一旦、廃れてしまいます。それを明治30年代ぐらいから、西村天囚という学者・記者が懐徳堂の復興を起案いたします。「懐徳堂祭典執行次第」の上段に儒教の礼式が書いてあって、「第四令 拜禮」の最後に西村時彦というのがその人で、天囚という号を持っているんです。当時、朝日新聞記者でした。その隣に土居通夫と書いてありますね。大阪商工会議所の会頭でございます。それから小山健三というのは、銀行家だったと思います。それからもっと右にいくと、住友吉左衛門の名が見られます。要するに大阪の政界、財界に民間の人たちが加わって懐徳堂が復興するんです。

当時、明治44（1911）年ころは、日清戦争と日露戦争が終わって、日本がものすごく西洋化している。同時に資本主義の矛盾も強くなってきて貧富の格差が無視できない、社会主義運動も起こってくる。国民としての一体感が失われつつある。そういう時に、西村たちは懐徳堂を復興しようとするんです。なぜか。漢学というのは、中国の学問じゃないんです。忠・孝という人間のモラ

ルを、最も大事にしてきた学問なんです。それが今、西洋化した大阪で失われているものであるということで、復興しようとするんですね。

西村天囚らの思いはそうだったかもしれないですが、私が「懐徳堂祭典執行次第」を眺めてみたときに面白いと思ったのは、彼らは懐徳堂を復興しようとしながら、別の面で、江戸時代の大阪が持っていた、あるいは大阪が歴史的に育んでいた伝統を、復活しようとしていることなんです。【図版21】の上段に、拵帳、献饌、祭文とありますが、これは儒教式のお祭で、釈奠と言います。現在大阪府下では、泊園書院の伝統を受け継いで、道明寺天満宮が続けておられますが、要するに孔子様の前でおこなう拝礼なんです。これを復興しようとしています。

もう一つは下段に、舞楽が奉納されています。関西大学なわ・大阪文化遺産学研究所が10月28日、関西大学120周年記念事業として、関西大学の中庭で、1,000名を集めておこなう予定にしているのが、この舞楽です。大阪の舞楽は、宮内庁に雅楽部ができた関係で楽人が東京に



【図版21】懐徳堂祭典執行次第

移り、一旦、失墜します。それが、この時の懐徳堂祭典において再興されました。この舞楽を再興したのが、懐徳堂祭典で「陵王」を演じている小野樟蔭という方なんです。

それから「桃李花」という演目には、菅楯彦の名前が見られます。この人は左方の楽人を自称した人で、鳥取の倉吉出身の日本画家で大阪名誉市民第一号です。このように近代になって、西洋文明が大阪を席卷し、社会の矛盾・不満が社会主義運動として出てきているなか、懐徳堂を復興しようという大きなイベントが起こるわけですが、そのイベントの中に、儒教の儀礼と舞楽が復興してくるんです。いいかえると懐徳堂の再興は、大阪文化の復興のプロジェクトでもあったのです。

おわりに

最後になりますが、西村天囚は鹿児島島の種子島の出身です。大阪に出てきて、朝日新聞社に拾われて、勉強いたします。菅楯彦は先ほど言いましたように、鳥取倉吉の人です。一方、小野樟蔭は大阪の願泉寺という西成にあるお寺の住職です。江戸時代の大坂文化が、明治になって廃れる危機があった時に、生まれも育ちも違う彼らが、それを復興しようと企てたんです。まさに文化遺産として復興しようという動きがあった。西村天囚は、大阪人文会というものを明治42(1909)年につくります。そして大阪の政界・財界の人たちにも呼びかけて、懐徳堂の復興を計画するのですが、西村天囚は「懐徳堂は大阪の公有物である。大阪のみんなのものだ」といいます。その動きに植田一郎は、特別会員として、全国166人の中のひとりとして加わるんですね。

我々は今、高橋センター長を中心として、大阪の失われてきた文化遺産の復興運動をしているんですが、我々が最初ではない。ひょっとしたら懐徳堂の復興というのは、大阪の古きよき伝統、いわば文化遺産を復興しようとした、最初の動きであったかもしれない。もちろん戦後になっても行われ、我々が現在、受け継いでいる。ただ今の我々の方が有利なのは、皆さんのように地域に根ざして、文化を支えて下さっている方が多数、いることです。しかも頭の中だけではなくて、着ていたものとか、建物とか、文化遺産の各方面について明らかにできる人たちが揃ってきているわけですから、条件たるや、この時代の人たちよりもはるかに優れた条件を持っているわけであります。しかし、志はひとつなんです。大阪が持っていた文化の遺産や伝統を、今によみがえらせたいということなんです。そのような意味で、植田さんの資料は、そういうことの手がかりも与えてくれるんじゃないかと思っています。

最後は手前味噌的なこと申し上げましたが、これで報告を終わらせていただきたいと思います。どうぞ清聴ありがとうございました。

藪田 貴(やぶた ゆたか)

関西大学文学部教授。当センターでは総括プロジェクトリーダーと学芸遺産研究プロジェクトリーダーを務める。専門は日本近世史。

現在、女性史を中心として国内はもとより、海外においても研究活動を広げている。

近著に『日本近世史の可能性』(校倉書房2005年)、『近世大坂地域の史的的研究』(清文堂2005年)がある。



植田家調査風景 (左) 古文書調査 (右) 書籍調査